

薬史学会通信

No. 17 1993年 2月

☎113

東京都文京区本郷7-2-2
（財）学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

日本薬史学会総会ご案内

日 時 : 1993(平成5)年4月17日(土) 午後

場 所 : 東京大学薬学部 3F 記念講堂(文京区本郷7-3-1)

次 第 : 13:30より 総 会

14:00より 総会講演

「科学史研究のあり方について(仮題)」

東京大学・先端科学技術研究センター教授

村 上 陽一郎 氏

講演終了後 懇親会・医学部図書館地下食堂

—講演は入場無料・来聴歓迎—

「第2回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」へのお誘い

昨年度から始めた「ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」の本年度企画を次のように実施する予定です。

会員以外の方のご参加も歓迎致しますので、関心をお持ちの方々にお知らせ頂ければ幸いです。

期 日：1993(平成5)年5月5日～13日

訪問先：フランクフルト

ダルムシュタット (Eメルク社博物館
・エンゲル薬局)

ヘッペンハイム (リービッヒ薬局)

ハイデルベルグ (国際薬史会議・薬学博物館)

ギーセン (リービッヒ博物館)

ヴュルツブルグ, ローテンブルグ (医薬史蹟)

ミュンヘン (ドイツ博物館) 等

費 用：460,000円

日本薬史学会西部支部講演会



薬史学会通信No.16記載の講演会が1月19日に開催され本学会員以外の参加を得て盛況であった。

「第2回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」関連話題

訪問先と斎藤茂吉の短歌

末廣 雅也

明治政府が独逸医学を採用してより医学、薬学、化学の研究に多くの留学生が独逸の地を踏んでいる。今回計画しているツアーの訪問地での昔の留学生の生活の一端を探ってみるのも興味深いことである。

そう思いながら斎藤茂吉全集（岩波書店）を手にとってみた。「アララギ」派の歌人として有名な斎藤茂吉は東大で医史学にも造詣の深い呉秀三教授のもとで精神病学を専攻し、大正6年から長崎医専の教授になった後、大正10年10月から欧州留学へ出発した。大正11年1月より同12年7月はウィーンに、その後は大正13年7月までミュンヘンに滞在して精神医学、神経学を研鑽したが、その間に各地を旅行して見聞を広めている。留学先で纏めた専門領域の論文のほか1,451首の短歌と随筆が全集に収められている。第四歌集「遠遊」はウィーン時代、第五歌集「遍歴」はミュンヘン滞在后パリその他の欧州各地を巡った後、船旅で

の帰国までの作品が収められている。本稿では今回のツアーのスケジュールに従って私なりに興味をひいた短歌を紹介する。短歌はすべて縦書きであるが止むを得ず横書きとしたが、原作のままの字を用いた。

(1) フランクフルト

大正11年8月12～14日に訪れ、大学などを訪問している（遠遊）。

- ゲエテの家われも見めぐりおほよその旅人のごと出でて来りぬ
- 同胞の研究室をも今日は見ぬ小さき不平も無くて居りにき

(2) ギーセン、ライン下り

その後8月14日より15日までギーセンの大学の精神病学教室を訪ねて16日にはマインツより乗船して夕方ボンに上陸している。

- 禪をきかきよりラインの河の名を聞いて今日現実なる船のうへの旅

(3) ハイデルベルグ

大正13年6月19日より21日まで滞在（遍歴）。

- Neckarネツカーはこゝに大きくなり居りて名にききし

橋をけふはわたりぬ

- 見おろして吾等しづかにおもふなりこの古き町に「学」ぞさかゆる

(4) ウェルツブルグ

大正11年8月11, 12日に訪れている(遠遊)。

- シーボルトの記念像を暫し立ち見るに長崎鳴瀬の事をしおもふ

板沢武雄氏の「シーボルト」(吉川弘文館)によるとシーボルトの胸像は1882年に建てられ、その広場をシーボルト広場、それに続く通りはシーボルト通りと名づけられている。

(5) ミュンヘン

大正12年7月19日にミュンヘンに移って来て直ちにシュピールマイエル教室に入った。

- バヴァリアは山高けれや雷の雨業房の窓をふるはせ降りぬ

茂吉はLaboratoriumを「業房」と訳してしばしば用いているが如何にも明治人らしい。因みに「業績」という語は森鷗外がはじめて用いたというのを聞いたことがある。

同年12月28日, Alte Pinakothekを訪れている。

- レムブラントのSylviusの像を今日もみて歳暮の一日心は和ぎぬ

ライデン大学教授Sylvius(1614~1672)は脳のシルヴィウス導管, シルヴィウス裂溝にその名を残すとともにイアトロケミストの中心的存在だったので茂吉は親近感を覚え、しかも巨匠レンブラントが画いたということで気に入ったのであろう。

12月30日(日曜)と翌年1月5日(土曜)にはこの地で客死したシーボルトの墓を訪ねている。

- 雪ふみて南方墓地にシーボルトの墓をたづねぬ雪ふりみだる
- 雪つもる南方墓地にシーボルトの子の墓たづねけふも吾ゆく(1月5日)

「1月9日, 呉先生のシーボルト研究のため民族博物館を訪ひ, Dirr 教授, Schermann 教授に会ふ」と記した次の一首がある。

- シーボルト関係の日本物見むとしてカンテラの火をともして行くも

都市・薬局・薬剤師ギルド

川瀬 清

○ヨーロッパ諸都市の成り立ち

ヨーロッパの鉄道で旅をしていて気付くことは、都市と農村のバランスが美事にとれている事だ。広々とした田野を走ることしばらくして、やがて列車は遅くなり、時に旧城壁を通過して、市街地に入り駅に着く。そして音もなく逆方向に走り出し、さっきの城壁のあたりの所で曲って次の都市に向って行く。

之は所謂「終着駅 terminus」で、東京で言えば上野、昔の両国、汐留(新橋)に見られた型。

ヨーロッパ都市は、その大部分が11世紀くらいから、Markt-platz(広場)を中心に発生し、多くは同心円的、時に渦巻型(パリ)に成長して今日に及んでいる。周囲は城壁で固めて自衛をしたから、成立年代順に多重の城壁を見ることもある。またモータリゼーションの影響で、とり壊されて都市環状道路に変身している場合もある。

鉄道は街道沿いに敷設され、都市に入ってくるが広場までは入れず、行き停まりになっている。そこで後戻り運転が出来るように、後部車輛には小規模な制御装置が備えてある。しかし最近では能率が悪いので地下鉄方式をとり入れ都心を貫通させる所もある。

さて、街の中心広場には必ず、市庁舎と教会があり、それに金融業など、都市の有力者の店が肩を並べているが、薬局もその一つに入っていた。中~近世における薬剤師の社会的地位の高さを示したものであろう。

○薬局・薬剤師の社会的位置づけ

まず、上記の好適な例をローテンブルグで見ることが出来る。

ローテンブルグは、ロマンティック街道中歴史的雰囲気を感じ、今日に残す観光の名所であり、その昔、強力な盗賊に襲われた同市が、市長のビールを飲み振りの豪放さによって救われたと物語られている。その市庁舎の横の所にあるライオン薬局、

一次頁下段に続く—

日本薬学会第113年会(大阪)薬史学部会

1993(平成5)年3月29日(月) 大阪工業大学7号館765号室

13:00~

星一の南米ペルーに賭けた壮図

星葉大・薬理 ○三澤 美和

『肥後国内熊本領産物帳』所蔵の薬用植物

熊本工大 ○浜田 善利

江戸中期の木曾谷における薬種に関する一回状について

○後藤 尚夫 岐阜薬大 田中 俊弘

薬の携帯とその容器の史的 연구(10)

売薬と薬の携帯

藤沢薬工 ○服部 昭

14:00~

近代日本医薬品産業の発展 その8

昭和初期における医薬産業の状況と製薬企業(2)

日本薬史学会 ○山田 久雄, 山田 光男

ツェンペリーの来日とその意義 (第10報)

一水銀水療法について一

スズケン ○高橋 文

日本薬局方に見られた鉄剤の変遷

東日本学園大歯 松本 仁人 日本薬史学会 ○山田 光男

15:00~

インスリンおよびその製剤に関する薬局方の史的考察(その4) 亜鉛について

日本薬史学会 ○末広 雅也

明治24年関西で開催の日本薬剤師聯合臨時会

熊大・岡大名誉教授 ○小山 鷹二

薬事法と薬剤師法の項目別の新旧比較について(統報)

日本薬史学会 ○末松 正雄

敗戦GHQの軍政・麻薬処方箋の創製: 平和日本の現在平和時の麻薬処方箋へ

日本医史学会 ○中室 嘉祐

第二次大戦後の日米薬剤学の比較

薬史学会 ○金庭 延慶 昭和大歯病・薬剤 鷺見 正宏

16:00~

'82年末から'83年に薬業-学界において、社会問題化あるいは刑事事件化した一連の不祥事件の体験

医薬事評論 ○岩城利一郎

一前頁より一

それが如何に旧いものであるか現地で直接に見てきて頂きたい。

有機化学の父リービヒが薬剤師徒弟であった頃の薬局も、小さな田舎町ではあるがヘッペンハイムのマルクトプラッツにあった。

現代専門職を語るとき、中世以来の職人の存在を無視することはできない。漫画家のサトウサンペイさんが、最近ドイツへ行って来られ、マイスター制度が健在であって、技能・理論とともに経営能力と子弟への指導力の卓越している事を報告(朝日新聞・暮しの手帖)しているが、嘗ては薬剤師も一般的職人と等しく3階層の構成になっていた。

一般: Meister - Geselle - Lehrling

親方 職人 徒弟

薬業: Apotheker - Apo.- gehilfe - Apo.- lehrling

薬剤師 同助手 同徒弟

そして、この制度は1874(明治7)年公布の医制にも反映され「調薬」の有資格者を、薬舗主、薬

舗手代、薬舗見習の3者に限り、そのうち薬舗見習は、他の2者の面前でなければ作業できない規定とした。

上記のうち職人は、徒弟時の親方の元を去って別の親方を探して修業を積み重ねばならなかった。之をWandern(遍歴)と言った。シューベルトの名曲「美しき水車小屋の娘」の第一曲も遍歴からはじまっている。言うまでもなく、この歌曲は、粉ひき職人の修業途上での生活と心を扱っている。ついでながら、シューベルトの冬の旅も、遍歴職人の歌として聞いた方が実感が湧いてくる。

ところで薬剤師助手も遍歴が義務づけられていた。しかしこの面での実態は、日本の薬学教育史の世界で、あまり議論されていない。日本でも西洋由来の芸術家の世界では、多くの師に学んだ事が評価されているが、他の伝統的芸能の世界では家元制度による閉鎖システムのままでいる。

薬史学会々費を前納下さい

一般:(年)5,000円 学生:(年)2,000円

振替口座 東京2-67473 日本薬史学会